

古典述語論理計算LKの拡張とその応用

和泉 孔二

Extension of Classical Predicate Logic Calculus LK and Its Application

Koji IZUMI

1. ま え が き

最近の情報科学の分野において広く知られているLISPとPROLOGは、それぞれ帰納的関数と述語論理¹⁾といった数学基礎論の概念と対応していることは周知の事実である。また、様相論理²⁾から派生した時制論理がプログラム理論の基礎づけに有効であることもよく知られている。このように、数学基礎論と情報科学との関連性は今後ますます深くなっていくものと考えられる。

本論文では、まず集合の四則演算を随伴性および双対性という概念のもとで定式化している。この際、商集合演算を提案することにより、調和のとれた集合演算どうしの関係を構築している。次に、これらの四則演算を古典述語論理計算LKの論理記号に対応させることを試み、商集合演算は含意 \rightarrow に相当しているので、商集合演算に双対な差集合演算に相当する論理記号である双対含意 \leftarrow とそれから導ける双対否定 \neg とをLKに付加することを提案している。

また、本論文では、以上のように拡張した古典述語論理計算LKにおける式の定義を制限することによって、直観主義述語論理計算LJおよび双対直観主義述語論理計算DLJを定式化できることを示し、これら3つの体系LK, LJ, DLJの諸性質を導いている。なお、それぞれの体系において否定 \neg と双対否定 \neg とが同等な概念であることをも示している。

2. 随伴性および双対性に基づく集合の四則演算の構成

まず、圏論³⁾で取り扱われる随伴性の概念を述べよう。

〔定義 2.1〕 2つの圏 \mathcal{A} , \mathcal{B} に対し, 2つの関手 F , G が

$$\mathcal{A} \begin{array}{c} \xrightarrow{F} \\ \xleftarrow{G} \end{array} \mathcal{B} \quad (1)$$

であり、かつ任意の \mathcal{A} の対象 A と \mathcal{B} の対象 B に対して

$$\mathcal{A}(F(B), A) \simeq \mathcal{B}(B, G(A)) \tag{2}$$

となるときに、 F は G の左随伴関手である、または G は F の右随伴関手であると呼び、記号で

$$F \dashv \vdash G \tag{3}$$

と表す。

この定義を集合の圏Setsに限定し、射を集合間の包含関係に対応させて考えると、集合論的な随伴性は次のように定義される。

〔定義 2.2〕 2つの集合 A, B に対し

$$F(B) \subseteq A \iff B \subseteq G(A) \tag{4}$$

を満たす2つの集合関数 F, G が存在するとき、 F を G の左随伴である、または G は F の右随伴であると呼ぶ。

同様に、束論的な随伴性は次のように定義できる。

〔定義 2.3〕 2つの束 L_1, L_2 に対し

$$L_1 \begin{array}{c} \xleftarrow{f} \\ \xrightarrow{g} \end{array} L_2 \tag{5}$$

なる2つの関数 f, g が

$$f(q) \leq p \iff q \leq g(p) \quad (\forall p \in L_1, \forall q \in L_2) \tag{6}$$

という条件を満たすとき、 f は g の左随伴である、または g は f の右随伴であると呼ぶ。

さて、圏論で取り扱われる双対性の概念とは次のようなものである。

〔定義 2.4〕 圏 \mathcal{C} に対し、その双対圏 \mathcal{C}^{op} とはその対象全体の集合が \mathcal{C} の対象全体の集合と同じであり、 \mathcal{C}^{op} の射全体の集合も \mathcal{C} の射全体の集合と同じである。ただし、 \mathcal{C}^{op} における任意の射 $f: A \rightarrow B$ の存在は、 \mathcal{C} において射 $f: B \rightarrow A$ が存在することによって規定される。図で示せば

$$\begin{array}{ccc} B & & B \\ f \downarrow & \iff & f \uparrow \\ A (in \mathcal{C}) & & A (in \mathcal{C}^{op}) \end{array}$$

となる。

〔注意〕 この双対性の概念を順序集合で考えれば、次のような双対の原理となる。すなわち、順序集合 (S, \leq) で成立する命題 P に対し、 P に含まれる \leq をすべて \geq で置き換えて得られる P の双対命題 P^{op} を考えると、 P が定理であれば P^{op} もまた定理となる。

次に、集合の四則演算である和集合、差集合、積集合、商集合について述べよう。本論文で取り扱う和集合、差集合、積集合については周知の通りのものであるが、商集合の概念は新しく提案するものである。

〔定義 2.5〕 2つの集合 A, B に対し, それらの和集合 $A \cup B$ は合併集合, 積集合 $A \cap B$ は共通集合とし, 差集合 $A - B$ と商集合 A / B はそれぞれ次のように定義される。

$$A - B = A \cap B^c \tag{7}$$

$$A / B = (B \cap A^c)^c \tag{8}$$

ただし, A^c は A の補集合を表している。

〔注意〕 元来, 商集合という用語は次のような意味で使われている。すなわち, 集合 S における1つの同値関係 R に対し, R の同値類の集合を S の R に関する商集合と呼び, S / R と表している。

定義 2.5 より, 商集合 A / B は

$$A / B = A \cup B^c \tag{9}$$

とも表され, また, 商集合と差集合との間には

$$A / B = (B - A)^c \tag{10}$$

という関係があることがわかる。

さて, 完備 Heyting 代数を一般化した完備束半群, および双対完備束半群の理論⁹⁾によれば, 差集合と商集合は以下のように定義できる。

〔定義 2.6〕 2つの集合 A, B に対し

$$A - B = \cap \{X \mid B \cup X \supseteq A\} \tag{11}$$

$$A / B = \cup \{X \mid B \cap X \subseteq A\} \tag{12}$$

と定義する。

この定義 2.6 は, 集合の四則演算の随伴性および双対性を明確に示している。なぜなら, 式 (12) により

$$A \cap X \subseteq B \iff X \subseteq B / A \tag{13}$$

すなわち

$$A \cap \cdot \text{ --- } \vdash \cdot / A \tag{14}$$

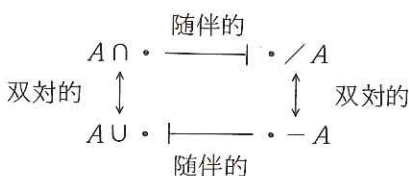
となり, また, 式 (11) により

$$A \cup X \supseteq B \iff X \supseteq B - A \tag{15}$$

すなわち

$$A \cup \cdot \text{ --- } \vdash \cdot - A \tag{16}$$

となる。ここで, 式 (13) と式 (15) は互いに双対な関係にもなっている。したがって, この状況は



と示される。換言すれば、和集合演算は差集合演算の右随伴であり、積集合演算は商集合演算の左随伴である。また、和集合演算と積集合演算、および差集合演算と商集合演算はそれぞれ双対な関係になっている。

3. 集合の四則演算に対応させた古典述語論理計算LKの拡張

公理的集合論⁶⁾を展開するとき、その基礎となるのはGentzenによる古典述語論理計算LK⁶⁾である。LKとは、次に述べる推論規則の与えられた論理体系のことである。

① 式の構造に関する推論規則

$$\frac{\Gamma \Longrightarrow \Delta}{D, \Gamma \Longrightarrow \Delta} (w \Longrightarrow) \qquad \frac{\Delta \Longrightarrow \Gamma}{\Delta \Longrightarrow \Gamma, D} (\Longrightarrow w)$$

$$\frac{\Gamma, C, D, \Pi \Longrightarrow \Delta}{\Gamma, D, C, \Pi \Longrightarrow \Delta} (e \Longrightarrow) \qquad \frac{\Delta \Longrightarrow \Pi, D, C, \Gamma}{\Delta \Longrightarrow \Pi, C, D, \Gamma} (\Longrightarrow e)$$

$$\frac{\Gamma, C, C, \Pi \Longrightarrow \Delta}{\Gamma, C, \Pi \Longrightarrow \Delta} (c \Longrightarrow) \qquad \frac{\Delta \Longrightarrow \Pi, C, C, \Gamma}{\Delta \Longrightarrow \Pi, C, \Gamma} (\Longrightarrow c)$$

$$\frac{\Gamma \Longrightarrow \Delta, D \quad D, \Sigma \Longrightarrow \Pi}{\Gamma, \Sigma \Longrightarrow \Delta, \Pi} (\text{cut})$$

ここで、 w はweakening (弱化), e はexchange (交換), c はcontraction (縮約)を表す。

② 論理記号に関する推論規則

$$\left. \begin{array}{l} A, \Gamma \Longrightarrow \Delta \\ A \wedge B, \Gamma \Longrightarrow \Delta \\ B, \Gamma \Longrightarrow \Delta \\ A \wedge B, \Gamma \Longrightarrow \Delta \end{array} \right\} (\wedge \Longrightarrow) \frac{\Gamma \Longrightarrow \Delta, A \quad \Gamma \Longrightarrow \Delta, B}{\Gamma \Longrightarrow \Delta, A \wedge B} (\Longrightarrow \wedge)$$

$$\frac{A, \Gamma \Longrightarrow \Delta \quad B, \Gamma \Longrightarrow \Delta}{A \vee B, \Gamma \Longrightarrow \Delta} (\vee \Longrightarrow) \qquad \left. \begin{array}{l} \Gamma \Longrightarrow \Delta, A \\ \Gamma \Longrightarrow \Delta, A \vee B \\ \Gamma \Longrightarrow \Delta, B \\ \Gamma \Longrightarrow \Delta, A \vee B \end{array} \right\} (\Longrightarrow \vee)$$

$$\frac{\Gamma \Longrightarrow \Delta, A \quad B, \Sigma \Longrightarrow \Pi}{A \rightarrow B, \Gamma, \Sigma \Longrightarrow \Delta, \Pi} (\rightarrow \Longrightarrow) \qquad \frac{A, \Gamma \Longrightarrow \Delta, B}{\Gamma \Longrightarrow \Delta, A \rightarrow B} (\Longrightarrow \rightarrow)$$

$$\frac{\Gamma \Longrightarrow \Delta, A}{\neg A, \Gamma \Longrightarrow \Delta} (\neg \Longrightarrow) \qquad \frac{A, \Delta \Longrightarrow \Gamma}{\Delta \Longrightarrow \Gamma, \neg A} (\Longrightarrow \neg)$$

$$\frac{A(t), \Gamma \Longrightarrow \Delta}{\forall x A(x), \Gamma \Longrightarrow \Delta} (\forall \Longrightarrow) \qquad \frac{\Delta \Longrightarrow \Gamma, A(a)}{\Delta \Longrightarrow \Gamma, \forall x A(x)} (\Longrightarrow \forall)$$

t は任意の項

a は下式には現れない。

a をこの推論規則の固有変数という。

$$\frac{A(a), \Gamma \Longrightarrow \Gamma}{\exists x A(x), \Gamma \Longrightarrow \Delta} (\exists \Longrightarrow) \qquad \frac{\Delta \Longrightarrow \Gamma, A(t)}{\Delta \Longrightarrow \Gamma, \exists x A(x)} (\Longrightarrow \exists)$$

a は下式には現れない。

t は任意の項

a をこの推論規則の固有変数という。

[注意] 推論規則の中の A, B, C, D は論理式であり, ギリシャ文字 $\Gamma, \Delta, \Pi, \Sigma$ は論理式の有限列 (空列も含めて) である。

さて, 本論文での LK の拡張を考えると, LK で証明可能な次の式は重要である。

$$\Longrightarrow (A \rightarrow B) \equiv \neg (A \wedge \neg B) \tag{17}$$

ただし, \equiv は同値を意味する補助的な論理記号であり, 論理式 F_1, F_2 に対し, $F_1 \equiv F_2$ は論理式 $(F_1 \rightarrow F_2) \wedge (F_2 \rightarrow F_1)$ を略記したものである。このとき, 2章で定式化した集合の四則演算の中の商集合演算と式 (17) とが同じ形をしていることに着目すると, LK の代数的モデルとなる完備 Boole 代数において

$$A / B = B \rightarrow A \tag{18}$$

が成立していると考えられる。また, 定義 2.5 から明らかなように, 商集合演算よりも差集合演算のほうがより原始的であるといえる。したがって, 本論文では, 差集合演算に対応する双対含意演算 \leftarrow を次のように定義する。すなわち, 完備 Boole 代数において

$$A - B = A \leftarrow B \tag{19}$$

と定められる双対含意演算 \leftarrow を LK に付加することを提案する。このとき, 論理記号 \leftarrow に関して, 次の2つの推論規則が成立する。

$$\frac{B, \Delta \Longrightarrow \Gamma, A}{B \leftarrow A, \Delta \Longrightarrow \Gamma} (\leftarrow \Longrightarrow) \qquad \frac{\Pi \Longrightarrow \Sigma, B \quad A, \Delta \Longrightarrow \Gamma}{\Pi, \Delta \Longrightarrow \Sigma, \Gamma, B \leftarrow A} (\Longrightarrow \leftarrow)$$

なぜなら, $(\leftarrow \Longrightarrow)$ については, Γ および Δ が空でない場合, Γ のすべての論理式を \vee で結合した論理式を C と考え, Δ のすべての論理式を \wedge で結合した論理式を D と考えれば

$$\frac{\frac{B, D \Longrightarrow C, A}{B \wedge D \Longrightarrow C \vee A}}{B \leftarrow A, D \Longrightarrow C}$$

より導かれる。このことは, 完備 Boole 代数において

$$b \wedge d \leq c \vee a \tag{20}$$

から

$$a^c \wedge b \wedge d \leq c \tag{21}$$

が導かれることに対応している。ただし、 a^c は a の補元を表す。なお、 Γ または Δ が空のときは、恒真命題 \top 、恒偽命題 \perp に対し、 $\perp \vee A = A$ および $B \wedge \top = B$ であることを用いれば明らかに推論規則($\leftarrow \implies$)は成立することがわかる。

次に、($\implies \leftarrow$)については、以下のように導ける。

$$\frac{\frac{\frac{B \leftarrow A \implies B \leftarrow A}{B \implies (B \leftarrow A) \vee A}}{B \implies B \leftarrow A, A} \quad A, \Delta \implies \Gamma}{\Pi \implies \Sigma, B \quad B, \Delta \implies B \leftarrow A, \Gamma} \quad \frac{\Pi, \Delta \implies \Sigma, B \leftarrow A, \Gamma}{\Pi, \Delta \implies \Sigma, \Gamma, B \leftarrow A}}$$

さて、完備Boole代数の最小元0、最大元1にそれぞれ恒偽命題 \perp 、恒真命題 \top が対応していたことにより、完備Boole代数における A^c とLKにおける A の否定 $\neg A$ とが対応し、LKにおいて

$$\implies \neg A \equiv A \rightarrow \perp \tag{22}$$

が証明可能となる。

本論文では、式(19)で定義された双対含意演算 \leftarrow に基づいて双対否定演算 \neg を

$$\implies \neg A \equiv \top \leftarrow A \tag{23}$$

がLKで証明可能となるようなものであると定義し、論理記号 \neg を論理記号 \leftarrow とともにLKに付加することを提案する。この論理記号 \neg に関しては、次の2つの推論規則が成立する。

$$\frac{\Gamma \implies \Delta, A}{\neg A, \Gamma \implies \Delta} \quad (\neg \implies)$$

$$\frac{A, \Delta \implies \Gamma}{\Delta \implies \Gamma, \neg A} \quad (\implies \neg)$$

なぜなら、($\neg \implies$)については

$$\frac{\Gamma \implies \Delta, A}{\top, \Gamma \implies \Delta, A} \quad \frac{\top, \Gamma \implies \Delta, A}{\top \leftarrow A, \Gamma \implies \Delta} \quad (\leftarrow \implies)$$

より導かれ、また、($\implies \neg$)については

$$\frac{\implies \top \quad A, \Delta \implies \Gamma}{\Delta \implies \Gamma, \top \leftarrow A} \quad (\implies \leftarrow)$$

より導かれる。

LKにおいては、否定 \neg と双対否定 \neg は同等な概念である。すなわち、

$$\implies \neg A \equiv \lrcorner A \tag{24}$$

がLKで証明可能であることが以下のように示される。

$$\frac{\frac{\frac{A \implies A}{\neg A, A \implies} (\neg \implies)}{A, \neg A \implies} (e \implies)}{\neg A \implies \lrcorner A} (\implies \lrcorner)}{\frac{\implies \neg A \rightarrow \lrcorner A}{\implies (\neg A \rightarrow \lrcorner A)} (\implies \rightarrow)}$$

$$\frac{\frac{\frac{A \implies A}{\implies A, \neg A} (\implies \neg)}{\implies \neg A, A} (\implies e)}{\lrcorner A \implies \neg A} (\lrcorner \implies)}{\frac{\implies \lrcorner A \rightarrow \neg A}{\implies (\lrcorner A \rightarrow \neg A)} (\implies \rightarrow)}$$

$$\frac{\implies (\neg A \rightarrow \lrcorner A) \wedge (\lrcorner A \rightarrow \neg A)}{\implies (\neg A \rightarrow \lrcorner A) \wedge (\lrcorner A \rightarrow \neg A)} (\implies \wedge)$$

〔注意〕 完備Boole代数において、 $\neg a$ と $\lrcorner a$ はそれぞれ

$$\neg a = a \rightarrow 0 = a^c \vee 0 = a^c \tag{25}$$

$$\lrcorner a = 1 \leftarrow a = 1 \wedge a^c = a^c \tag{26}$$

と変形されるので、明らかに同等であることがわかる。しかし、後述する直観主義述語論理計算LJの代数的モデルとなる完備Heyting代数であり、かつ双対直観主義述語論理計算DLJの代数的モデルとなる双対完備Heyting代数でもある $L = [0, 1]$ の場合は、LJでの否定に相当する $\neg a$ とDLJでの否定に相当する $\lrcorner a$ は同等でない。なぜなら

$$a \rightarrow b = \vee \{x \mid a \wedge x \leq b\} = \begin{cases} 1 & (a \leq b) \\ b & (a > b) \end{cases} \tag{27}$$

$$b \leftarrow a = \wedge \{x \mid a \vee x \geq b\} = \begin{cases} 0 & (a \geq b) \\ b & (a < b) \end{cases} \tag{28}$$

と表されることより

$$\neg a = a \rightarrow 0 = \begin{cases} 1 & (a = 0) \\ 0 & (0 < a \leq 1) \end{cases} \tag{29}$$

$$\lrcorner a = 1 \leftarrow a = \begin{cases} 1 & (0 \leq a < 1) \\ 0 & (a = 1) \end{cases} \tag{30}$$

となっているからである。

4. 直観主義述語論理計算LJと双対直観主義述語論理計算DLJ

本論文では、古典述語論理計算LKに2つの論理記号 \leftarrow , \lrcorner とそれらに関する推論規則とを付加した体系を考えてきたが、以下、LKでの式の定義を制限することによって得られる直観主義述語論理計算LJと双対直観主義述語論理計算DLJとについて述べよう。

いま、LKにおける式 $\Gamma \implies A$ を次のように制限することによって、LJおよびDLJを定式化する。

〔定義4.1〕 LJにおける式 $\Gamma \implies A$ とは、右辺の A が高々1つの論理式から成るものと

する。また、DLJにおける式 $\Gamma \Rightarrow A$ とは、左辺の Γ が高々1つの論理式から成るものとする。

このように定義することによって、論理記号 \leftarrow および ∇ が付加されたLKの推論規則は、LJでは以下ようになる。

[LJにおける推論規則]

① 式の構造に関する推論規則

$$\frac{\Gamma \Rightarrow A}{D, \Gamma \Rightarrow A} (w \Rightarrow) \qquad \frac{A \Rightarrow}{A \Rightarrow D} (\Rightarrow w)$$

$$\frac{\Gamma, C, D, \Pi \Rightarrow A}{\Gamma, C, D, \Pi \Rightarrow A} (e \Rightarrow)$$

$$\frac{\Gamma, C, C, \Pi \Rightarrow A}{\Gamma, C, \Pi \Rightarrow A} (c \Rightarrow)$$

$$\frac{\Gamma \Rightarrow D \quad D, \Sigma \Rightarrow \Pi}{\Gamma, \Sigma \Rightarrow \Pi} (\text{cut})$$

ここで、LJにおける式の定義から、LJには $(\Rightarrow e)$ や $(\Rightarrow c)$ はないことに注意しておく。

② 論理記号に関する推論規則

$$\left. \begin{array}{l} A, \Gamma \Rightarrow A \\ A \wedge B, \Gamma \Rightarrow A \\ B, \Gamma \Rightarrow A \\ A \wedge B, \Gamma \Rightarrow A \end{array} \right\} (\wedge \Rightarrow) \qquad \frac{\Gamma \Rightarrow A \quad \Gamma \Rightarrow B}{\Gamma \Rightarrow A \wedge B} (\Rightarrow \wedge)$$

$$\frac{A, \Gamma \Rightarrow A \quad B, \Gamma \Rightarrow A}{A \vee B, \Gamma \Rightarrow A} (\vee \Rightarrow) \qquad \left. \begin{array}{l} \Gamma \Rightarrow A \\ \Gamma \Rightarrow A \vee B \\ \Gamma \Rightarrow B \\ \Gamma \Rightarrow A \vee B \end{array} \right\} (\Rightarrow \vee)$$

$$\frac{\Gamma \Rightarrow A \quad B, \Sigma \Rightarrow \Pi}{A \rightarrow B, \Gamma, \Sigma \Rightarrow \Pi} (\rightarrow \Rightarrow) \qquad \frac{A, \Gamma \Rightarrow B}{\Gamma \Rightarrow A \rightarrow B} (\Rightarrow \rightarrow)$$

$$\frac{\Gamma \Rightarrow A}{\neg A, \Gamma \Rightarrow} (\neg \Rightarrow) \qquad \frac{A, A \Rightarrow}{A \Rightarrow \neg A} (\Rightarrow \neg)$$

$$\frac{B, A \Rightarrow A}{B \leftarrow A, A \Rightarrow} (\leftarrow \Rightarrow) \qquad \frac{\Pi \Rightarrow B \quad A, A \Rightarrow}{\Pi, A \Rightarrow B \leftarrow A} (\Rightarrow \leftarrow)$$

$$\frac{\Gamma \Rightarrow A}{\nabla A, \Gamma \Rightarrow} (\nabla \Rightarrow) \qquad \frac{A, A \Rightarrow}{A \Rightarrow \nabla A} (\Rightarrow \nabla)$$

$$\frac{A(t), \Gamma \Longrightarrow \Delta}{\forall x A(x), \Gamma \Longrightarrow \Delta} (\forall \Longrightarrow)$$

t は任意の項

$$\frac{\Delta \Longrightarrow A(a)}{\Delta \Longrightarrow \forall x A(x)} (\Longrightarrow \forall)$$

a は下式には現れない。

a をこの推論規則の固有変数という。

$$\frac{A(a), \Gamma \Longrightarrow \Delta}{\exists x A(x), \Gamma \Longrightarrow \Delta} (\exists \Longrightarrow)$$

a は下式には現れない。

a をこの推論規則の固有変数という

$$\frac{\Delta \Longrightarrow A(t)}{\Delta \Longrightarrow \exists x A(x)} (\Longrightarrow \exists)$$

t は任意の項

さて、以上に示した LJ の推論規則と同様に、DLJ の推論規則も式の左辺が高々1つの論理式から成るという制限を付けることによって示すことができるが割愛する。また、LKの場合と同様に、LJ および DLJ においても

$$\Longrightarrow \neg A \equiv \neg A \tag{31}$$

が証明可能となる。したがって、以下、LKでの否定を \sim 、LJでの否定を \neg 、DLJでの否定を \neg と書くことと約束する。このとき、これらに関する推論規則を列記すると

$$\frac{\Gamma \Longrightarrow \Delta, A}{\sim A, \Gamma \Longrightarrow \Delta} (\sim \Longrightarrow)$$

$$\frac{A, \Delta \Longrightarrow \Gamma}{\Delta \Longrightarrow \Gamma, \sim A} (\Longrightarrow \sim)$$

$$\frac{\Gamma \Longrightarrow A}{\neg A, \Gamma \Longrightarrow \Delta} (\neg \Longrightarrow)$$

$$\frac{A, \Delta \Longrightarrow \Gamma}{\Delta \Longrightarrow \neg A} (\Longrightarrow \neg)$$

$$\frac{\Longrightarrow \Delta, A}{\neg A \Longrightarrow \Delta} (\neg \Longrightarrow)$$

$$\frac{A \Longrightarrow \Gamma}{\Longrightarrow \Gamma, \neg A} (\Longrightarrow \neg)$$

となる。また、ある論理体系 S で式 $\Gamma \Longrightarrow \Delta$ が証明可能であることを $S \vdash \Gamma \Longrightarrow \Delta$ と書き、証明可能でないことを $S \nvdash \Gamma \Longrightarrow \Delta$ と書くことにすると、次の定理が成り立つ。

[定理 4.1]

- ① LK $\vdash \Longrightarrow A \vee \sim A$
- ② LK $\vdash \Longrightarrow \sim(A \wedge \sim A)$
- ③ LK $\vdash \Longrightarrow \sim \sim A \equiv A$
- ④ LJ $\vdash \Longrightarrow A \vee \neg A$
- ⑤ LJ $\vdash \Longrightarrow \neg(A \wedge \neg A)$
- ⑥ LJ $\vdash \Longrightarrow A \rightarrow \neg \neg A$
- ⑦ LJ $\vdash \Longrightarrow \neg \neg A \rightarrow A$
- ⑧ DLJ $\vdash \Longrightarrow A \vee \neg A$
- ⑨ DLJ $\vdash \Longrightarrow \neg(A \wedge \neg A)$
- ⑩ DLJ $\vdash \Longrightarrow A \rightarrow \neg \neg A$

$$\textcircled{11} \quad \text{DLJ} \vdash \implies \neg \neg A \rightarrow A$$

ここで、 $\textcircled{1}$, $\textcircled{4}$, $\textcircled{8}$ は排中律の成立・不成立を示し、 $\textcircled{2}$, $\textcircled{5}$, $\textcircled{9}$ は矛盾律の成立・不成立を示している。

(証明) $\textcircled{8}$ と $\textcircled{11}$ についてだけ示す。他は同様に示される。

$\textcircled{8}$ について:

$$\begin{array}{l} \frac{A \implies A}{\implies A, \neg A} (\implies \neg) \\ \frac{\implies A, \neg A}{\implies A, A \vee \neg A} (\implies \vee) \\ \frac{\implies A, A \vee \neg A}{\implies A \vee \neg A, A} (\implies e) \\ \frac{\implies A \vee \neg A, A}{\implies A \vee \neg A, A \vee \neg A} (\implies \vee) \\ \frac{\implies A \vee \neg A, A \vee \neg A}{\implies A \vee \neg A} (\implies c) \end{array}$$

$\textcircled{11}$ について:

$$\begin{array}{l} \frac{A \implies A}{\implies A, \neg A} (\implies \neg) \\ \frac{\implies A, \neg A}{\neg \neg A \implies A} (\neg \implies) \\ \frac{\neg \neg A \implies A}{\implies \neg \neg A \rightarrow A} (\implies \rightarrow) \end{array} \quad (\text{Q. E. D.})$$

[定理 4.2]

$$\textcircled{1} \quad \text{LJ} \vdash \implies \neg \exists x A(x) \equiv \forall x \neg A(x)$$

$$\textcircled{2} \quad \text{DLJ} \vdash \implies \neg \forall x A(x) \equiv \exists x \neg A(x)$$

(証明) $\textcircled{2}$ についてだけ示す。

前半:

$$\begin{array}{l} \frac{A(a) \implies A(a)}{\implies A(a), \neg A(a)} (\implies \neg) \\ \frac{\implies A(a), \neg A(a)}{\implies A(a), \exists x \neg A(x)} (\implies \exists) \\ \frac{\implies A(a), \exists x \neg A(x)}{\implies \exists x \neg A(x), A(a)} (\implies e) \\ \frac{\implies \exists x \neg A(x), A(a)}{\implies \exists x \neg \forall(x), \forall x A(x)} (\implies \forall) \\ \frac{\implies \exists x \neg \forall(x), \forall x A(x)}{\neg \forall x A(x) \implies \exists x \neg A(x)} (\neg \implies) \\ \frac{\neg \forall x A(x) \implies \exists x \neg A(x)}{\implies \neg \forall x A(x) \rightarrow \exists x \neg A(x)} (\implies \rightarrow) \end{array}$$

後半:

$$\begin{array}{l} \frac{A(a) \implies A(a)}{\forall x A(x) \implies A(a)} (\forall \implies) \\ \frac{\forall x A(x) \implies A(a)}{\implies A(a), \neg \forall x A(x)} (\implies \neg) \\ \frac{\implies A(a), \neg \forall x A(x)}{\implies \neg \forall x A(x), A(a)} (\implies e) \\ \frac{\implies \neg \forall x A(x), A(a)}{\neg A(a) \implies \neg \forall x A(x)} (\neg \implies) \\ \frac{\neg A(a) \implies \neg \forall x A(x)}{\exists x \neg A(x) \implies \neg \forall x A(x)} (\exists \implies) \\ \frac{\exists x \neg A(x) \implies \neg \forall x A(x)}{\implies \exists x \neg A(x) \rightarrow \neg \forall x A(x)} (\implies \rightarrow) \end{array} \quad (\text{Q. E. D.})$$

5. む す び

集合の四則演算を考察することからLKを拡張し、それに基づいてLJおよびDLJを定式化して、それらの諸性質を明確にすることができた。

本論文で取り扱った集合の四則演算については、種々の観点から検討する余地があるものと考えられる。また、LJおよびDLJの推論規則をファジィシステムの逆問題と同定問題⁷⁾に適用し、それらの解法を統一的に示すこともできるであろう。

参 考 文 献

- 1) 松本和夫：“情報数学1—束と論理”，森北出版 (1980).
- 2) 松本和夫：“数理論理学”，共立出版 (1970).
- 3) MacLane, S.：“Categories for the Working Mathematician”，Springer (1971).
- 4) 和泉孔二：“随伴的なファジィシステムとその応用に関する研究”，大阪府立大学博士論文 (1984).
- 5) Takeuti, G., Zaring, W.：“Axiomatic Set Theory”，Sprinter (1973).
- 6) Gentzen, G.：“Untersuchungen über das logische Schliessen I. II.”，
Mathematisch Zeitschrift, Vol. 39, pp. 176—210, pp. 405—431 (1935).
- 7) 和泉孔二：“ファジィシステムの逆問題と同定問題”，情報科学研究，第2号，pp. 31—49 (1988).

(1990年3月19日受理)